

平成 24 年度研究チーム活動中間報告（第 1 回目）

「甲南大学生のための SLSP (Second Language for Specific Purposes) 教育の研究」

No.123 研究幹事 茶山 健二 (理工学部)

「甲南大学生のための SLSP (Second Language for Specific Purposes) 教育の研究」では、甲南大学理工学部機能分子化学科と国際言語文化センターのドイツ語と日本語の科目が協力し、甲南大学生のためのより良い SLSP (Second Language for Specific Purposes) 教育のために、ニーズ分析・コース評価・モチベーションとソーシャルスキルを高める研究を目指して、自律した学習者としての甲南大学生を育成することを研究目的とする。上記の研究目的のもとに、本研究の内容は、以下の三構成から成っている。

1. 機能分子化学専攻学生のための化学英語演習のニーズ分析とコース・デザイン
2. 外国語としてのドイツ語学習者の学習成果向上のためのコース・デザインと教材の改善
3. 日本の社会文化に適応するための留学生の日本語能力の育成とソーシャルスキルのトレーニング

上記の 3 分科において、2012 年度に実施した研究及び 2013 年度に実施する予定の概要は以下の通りである。

1. 特定の目的のための第二言語 (SLSP) に対する学生の学習意識の調査の目的から、本年度も「化学英語演習 1」においてアンケート調査を実施する。なお昨年度の調査では、全般的に化学分野に関する英語習得の必要性について、主に就職や就業などの観点から比較的強く感じている様であった。一方学習に対する意識としては、例えば一般英語より化学英語の方が習得しやすいと考えている学生と、一般英語の方が習得しやすいと考える学生、特に差はないと考える学生の間に大きな偏りはなかった。化学英語をより習得しやすいと回答した学生の意見としては、化学の知識から英文の内容を類推することができる、単語の種類が限定的かつ高頻度である、などが挙げられる。一方一般英語をより習得しやすいと考える学生からは、なじみのない単語が多い、化学の知識が無いと理解できない、などの意見が寄せられた。このことから化学に関する知識の豊富な学生ほど、化学英語をより容易に感じる傾向があることが推察された。

2. 外国語としてのドイツ語学習者の学習成果向上のために、教材の改善を目的として、使用している教材のコンセプト (1. 教師の明示的な説明に頼らない発見型の文法学習、2. リーディングやリスニングに際しての語彙の推量型、3. ペア・ワークやグループ・ワークによる協働学習促進型) が、1. 学習者にどのように受容されているか、2. コン

セプトの受容と学習者の言語学習観には関係性がみられるか、3. コンセプトの受容と動機づけおよび学習成果には影響関係がみられるか、4. 教材のコンセプトは学習観に影響を与えるか、を中心に質問紙を使って量的に調査する。調査は、2013年5月と12月に基礎ドイツ語クラスで実施予定である。

3. 今年度の日本語科目では、日本語の文法・聴解・読解の能力とソーシャルスキルの関連を調査する。「ソーシャルスキルとは、対人場面において適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的・非言語的な対人行動とそのような対人行動の実現を可能にする認知過程である」(相川, 1996:87)と定義される。さらに田中(2000:24)では異文化間のソーシャルスキルについて、「文化によって必要な行動は異なり、同じ行動を行っても社会的な評価や不適切な行動への反応などが異なる。(略)実際の異文化適応上の困難には、文化特異的な要素を十分考慮したうえで明らかにするべき」と記されている。本学の留学生の来日時と帰国前の同一の日本語テストと調査紙を通じて、日本語能力とソーシャルスキルはどのように関連し変化するかを研究する。

以上、本年度は昨年度の成果及び本年度の成果を併せて、SLSP 教育のためのニーズ分析及びコース評価の研究手法を確立実践し、甲南大学生が高いモチベーションを保って、実社会に対応可能なソーシャルスキルを身につけることが可能になるコースのモデルを探求する予定である。